座談会に参加した学生の皆さん

SUIJI-SLP学生座談会

SUIJIのあんなこと！こんなこと！

SUIJIプログラムが始まって５か年が経過しようとしています。
今日は「SUIJI、実際どうやったん？」ということを皆さんにお聞きします。

SUIJIを知ったきっかけ、参加しようと思った理由（わけ）

藤野：では、まず、どうやってSUIJIプログラムを知ったのかを教えてくれる？

山口（以下、まゆは）：私は１回生の時に説明会に参加して、SUIJIプログラムのことをサラッと紹介されていたのを聞いたのが最初です。

名嘉眞（以下、ゆき）：私もそうでした。高知大学農学部１回生はみんなで説明会を受けて、配られたパンフレットを見て、「楽しそうだな。」と思いました。

谷本（以下、もゆ）：私は入学式の後、学科ごとに集まった時に、先輩が説明をしてくれました。

服部（以下、ジョン）：農学部での説明会の時にSUIJIを履修した先輩たちの説明（体験談）を聞いて、パンフレットを見て、「おもしろそうだな。」、そして「自分が変われそうだな。」と思いました。自分は人見知りで、高校時代は色々な経験が少ないと感じていたので、大学では色んなことに挑戦してみたくて参加を決めました。

貞松（以下、ちこ）：私は元々田舎に憧れがあって興味を持ちました。最初、海外には全く興味がなくて、逆に「国内の田舎でとにかく田植えとかをしてみたい。国内SLのサイトの高知県安田町に行ったら、魚掴みができて、鮎が食べられる！川遊びができる！」というのが魅力的で（笑）。

田野（以下、まこ）：私は新歓で先輩から「SUIJIいいよ。」と聞いて。最初はシラバスもきちんと読んでなかったのでSUIJIのことはよく知らなかったんですけど、授業の時に『最後の案内』ということで教えてもらって、それで決めました。海外に興味があったけど中々自分で行く勇気がなかったので、まず国内を見て、海外に行くという、両方体験できるのがいいかなと。それから地域活性化の活動もやりたかったです。大学ではその両方をやりたいと考えていて、SUIJIプログラムがちょうどそれらを兼ね備えていたので参加しようと思いました。

ゆき：パンフレットを見て、写っている人の顔がすごい楽しそうで。「大学生だし、海外、行っとくか！」っていうのもありました。最初はめっちゃ軽い気持ちだったので、本当に参加するかどうかギリギリまで迷いました。「海外」と言っても、アメリカやイギリス、ではなくむしろインドネシアでした。

もゆ：私は海外には全然興味なかったですね。「インドネシアか・・。私は行かんけど。」と思ってて。チラシを見たり先輩が宣伝してくれて、説明会も受けたんですけどね、それでも「自分には関係ないかな。」と思ってました。

ベーシックの経験を経て２年目のアドバンスドへ

まゆは：１年目の活動では、アドバンスドの先輩に言われるがまま、指示を受けるままに動いて、全てが終わっていくみたいな感じだったのが悔しくて…。だからアドバンスドとして「もう一回行こう！」と思いました。でも、アドバンスドの時も、流された感があったかな？（笑）。

ちこ：１年目のベーシックの時は、みんな、わけが分からないというままに地域に放り込まれて（笑）。地域の人にとってもSUIJIの学生の受け入れは初めてで、私たちのことも分からなかっただろうと思います。でも、私が感じたのは、すっごい安田町の人がいい人だということ。「この人たちにもう一回会いたい！」というのと、「もう少しちゃんとこの地域を知れたら…。」という気持ちで２年目も参加しました。

まこ：私は国内SLでは愛媛県西予市の明浜地区で活動をしたんですけど、ベーシックの時は、アドバンスドの先輩について行って、楽しんだだけで終わった感じでした。プログラムが終わって香川県に帰って考えてみたら、「もっと何かできたんじゃないかな」って。「自分から活動をしていかないといけない！これはアドバンスドとしてもう一回、行かないかん！」と思いました。

ジョン：自分もみんなと同じように「１年目は何もできなかった。」という後悔がありました。２年目の国内SLでは、その前に海外SLで自分がインドネシアでのプログラムを経験して変わったところを出して、サイトメンバーを引っ張っていこうという気持ちでした。それに、柏島のあったかくて、非日常感に溢れていることがすごく好きで、もう一回、柏島で活動してみたいなという思いで参加しました。

藤野：じゃあ、海外SLに話を移しましょうか。

ゆき：インドネシアはすごく自分が素でいられるというか、「楽（らく）だな～。手で食べていいんだ～。」みたいな（笑）。私はそれが楽しか

名嘉眞由記（ニックネーム／ゆき）

高知大学農学部国際支援学コースに在籍。国内SLは宇和島市の蒋淵サイト（愛媛県宇和島市）、海外SLはグヌン・キドゥル・サイトで活動。

ったですね。日本に帰ってきて、「ああ、靴、履かんといけんわ。」みたいな（笑）。２回目を考えた時は、「人も好きだし、忘れられない。また行きたいな。」と思ったのが大きかったです。それと１年目で行った時に、村で混植をやっていたのを見られたのも大きかった。これを見て『アグロフォレストリー』という農法に興味を持ち、日本に帰ってからもそのことを考えて一年間ずっとモヤモヤしていました。そういうことに興味を持った今の自分で現地に入ったら、１年目の時とは見える景色が絶対に違うと思ったので、もう一度インドネシアへ行きたいと思いました。「これで何も感じなかったらもう留学は考えない。関心を持ち始めていた『国際協力』にも関わらないかな。」っていうぐらいの決意を持って行きました。それと、海外SLのグヌンキドゥルサイトメンバーの仲が良くて、アドバンスドもこのメンバーでいけると知って楽しそうだと思った。それもインドネシアへ行った理由の１つです。

藤野：始め、海外に興味のなかったもゆは、どうして海外に行く気になった？

もゆ：なんでやったやろ？「後悔があったからもう一回行く」とかじゃなくって、自然の流れで「自分は行くもんだ。」と思っちゃったから。国内で参加した高川サイトでもそうやったけど、「自分が（地域を）変えてやる。」なんて、そんな大層なことできるわけないなと１年目の時に思ったし。ああ、言葉にしたら分からん（笑）。

アドバンスドの役割、活動中の“実は、こんなことがありました”なお話

藤野：では次に、アドバンスドの役割について話を進めていきましょう。国内・海外ではどんな感じで活動を進めていった？

まこ：明浜サイトは私を含めてアドバンスドが３人いて、始めに活動内容をガチッと決めてました。活動が始まると、ベーシックの学生から「それはアドバンスドの３人が考えたことで、私たちには他の感性があるし、これからそれを見つけていきたいから始めに目標は決めて欲しくない。」と言われたんです。１サイトに学生が10人も20人もいて、みんなそれぞれやりたいことがあるので、意見をまとめるのは本当に難しいなと思いました。何回もぶつかり合いがあったけど、最終的にお互い納得のいくようなものになったと思います。みんながそう思っていればいいんですけど（笑）。

田野 雅子（ニックネーム／まこ）

香川大学農学部応用生物科学科環境科学コースに在籍。国内SLは明浜サイト（愛媛県西予市）、海外SLはスプルモンデ・サイトのバラロンボ島で活動。

まゆは：銭坪サイトはアドバンスドが４人もいて、「多い。どうしよう。」みたいな感じ（笑）。１年目は『地域住民同士の雰囲気をやわらかくする』という思いでした。私はそれを２年目も継続していこうと思ってたんですが、「ほったらかしてたらいいじゃん。」、「後ろからフォローしたい。」、「もっとお節介焼きたい。」、「とりあえずレールだけ敷いてあげようや。」とアドバンスドの４人がバラバラの意見でした…。それらをまとめてチームとしてどうするのかをベーシックの学生に伝えるんですが、ベーシックの学生にたどり着く頃には、ぼやっとしたものしかできてなくて、「ごめん、これでなんとかして。」みたいな感じになって（笑）。ベーシックには申し訳なかった。私たちがベーシックの時は「あれやろう、これやろう。」って言われ過ぎてたので、「あまり口出ししないでおこう。」とかいろいろ考えていたわりに、形にならないものしかベーシックに与えられず（笑）。

もゆ：高川サイトは『この日に●●をする』というのは全部こっちで決めといて、活動の中身については口出しませんでした。活動自体はそれなりにやるだろうから、それぞれの感性で感じたらいいかなと思ってて。私が１つだけ厳しく言っていたのが『時間を守ろう。挨拶しよう。』ということでした。ベーシックの学生は「こいつ、めんどくさい先輩や」って思ってるはずなんですけど、それを覚悟しながら。アドバンスドは、嫌われ役みたいなイメージでやってました。「もゆさん、恐い」みたいな（笑）。あぁダメだ、SUIJIのことは言葉にできん（笑）。

ゆき：あとサイト間で、ちょっと対抗心あります（笑）。私にとっては、高め合いみたいな感じです。「あっちのグループ、めっちゃ仲良さそうやん。でも、こっちの方がもっと仲いいわ。」とか、他のサイトの最終プレゼンの内容を見て、「わっ、めっちゃできてるなー。」みたいな。どのサイトの学生も、「自分のサイトが本当に楽しかった。本当にいい出会いができた。」って言うし、自分も思います。地域が好きだからこその、そういう対抗心なんかなって思います。だからいいことだと思います。

藤野：ところで英語についてだけど、ジョンはどう？ジョンは（お勉強としての）英語、好きじゃないもんね（笑）。

全員：（笑）。

ジョン：自分は英語が全然話せなくて、まともに単語も覚えてないんで、ジェスチャーばっかりやったんです。最初は全然しゃべれなくて、緊張したり、羞恥心ていうんですかね。でも「もったいないな。」っていう気持ちが大きくて、恥ずかしくて顔を真っ赤にしてもいいんで話していこうと思ったんです。それと仲が良くなったインドネシア学生がいたんですが、彼と出会えたおかげで、話すのが怖くなくなった。それで乗り越えられたと思いますね。

小林：ジョンは試金石なんよ。ズバリ言っちゃうと、特に英語が得意ではない学生がプログラムでどう一皮が剥けるかっていうね。SUIJIは語学研修じゃないから。『グローバル』ってどうしても『英語』っていうイメージがあるじゃない。ジョンみたいな学生がどう育っていくかなというのは常に考えてる。だからそういった点で今の話が聞けてよかったよ。それは自信をもってほしい。

藤野：そう言えば、インドネシアの学生のレポートに『もゆが“キラキラ”はダメって常に言ってくれてた。締めるところは締めるっていうのが大事っていうことを、もゆから学んだ』って書いてたかな。

ゆき：えー、嬉しいね！

谷本　結花
（ニックネーム／もゆ）

愛媛大学法文学部人文学科観光まちづくりコースに在籍。国内SLは高川サイト（愛媛県西予市）、海外SLはグヌン・キドゥル・サイトで活動。

もゆ：あぁ、だからか…。それでグヌン・キドゥル・サイトが大変な事になった（笑）。インドネシア学生が作ってくれた日程が、ガッチガッチで固めてきて。インドネシアは“キラキラ”で、そもそも（『何事もきっちり』という意識・感覚が）ない所やけん。国内SLでは、キャラクター的に私は「時間！時間！」って彼らに言えてたところがあったと思うんですよね。それでグヌン・キドゥル・サイトでこういうことになって、日本学生のアドバンスド５人が集まって、「これ、続かんわ。ちょっと勘違いしてるよね。どうしよう。」と話して大改革しました。まず日本語でバーッと話し合って、それを何とかまとめて英語で説明して、インドネシアの学生と意見を出していって、オフィーとハリー（インドネシア学生）とやり合って、何とか通じた時は「おし！」みたいな（笑）。それでやっと“キラキラ”に戻り始めて向こうものびのびみたいな（笑）。

まこ：スプルモンデ・サイトは、準備は美朗（愛媛大学のアドバンスド学生）とジョンが、インドネシア側と連絡をとってくれたよね。

ジョン：愛媛大学は、SUIJIとは別のプログラム（PPBL）で、インドネシアに行ってるじゃないですか。だから、ちょっと自分一人がしゃしゃり出て連絡を取ったりとかしてて（笑）。「実は…」という話ですが、とかく海外SLは、インドネシア学生がリーダーシップを取って進めていくイメージがありますよね？でもスプルモンデは、結構、日本学生の提案が中心になって進められて、インドネシア学生が、あまり提案してこないなっていうのを珍しく感じていました。始めインドネシア学生のふるまいを見ていると「活動中は楽しければ、それでいいじゃない～。」というような印象も受けました。また、インドネシア学生が、あまりバランロンポ島を好きじゃないと感じることもあったんです。その理由が、サイト活動していく中で徐々に分かったことなんですけど、インドネシア学生が準備で何回かサイトに行ってくれてたんですけど、地域の人に「ホームステイさせてください。」って言ったら、「じゃあ、お金はいくらくれるの？」とか「これやったら、いくら支払ってくれるんだ。」とか、何をするにもお金を要求されていたことを聞いたんですよ。

まこ：日本学生が「こうしたい。」と提案してもインドネシア学生は、「ちょっとそれはできないんだ。」みたいな感じの雰囲気がたまにあって。「なんでだろうね？」って日本学生は思ってました。最後は心の中の本音の言い合いで、本当に最後の最後に、「あぁ、あの時のあれは、そうことだったんだね」っていうのが分かったんです。

藤野：インドネシア学生の本音が聞けたのは、どういうタイミングだった？

まこ：やっぱりミーティングをやったからですね。日本学生は「今日はこれまでの復習をしよう。」と決めるんですけど、インドネシア学生は、「どうにかなるよ。」みたいな感じだったんですよ。日本学生アドバンスド４人が「今の状況は、ちょっといかんよね。もっと決めていかないとやばいよね。」ってなって、私たちがインドネシア学生に「ミーティングやろう。」って声をかけて、そこで本音の言い合いみたいになって話し合いました。

藤野：そういう状況ってベーシックの学生は気付いてた？

ジョン：ベーシックの学生には、「楽しんでもらえばいいかな」と（笑）。めちゃめちゃ悩むのはアドバンスドの学生ですかね、やっぱり。アドバンスドの学生だけでやっちゃうのはよくないと思うんですけど…よく自分たちアドバンスドの学生４人では、「薄い活動になってるね。」とか言ってました。

藤野：まゆはは、出発前日に体調不良になって、残念ながら海外SLのアドバンスド参加ができなかったけど、本当だったらトゥガル・サイトで参加のはずだったよね。準備はしっかりしてたもんね（笑）。

まゆは：バリバリしてましたよ（笑）。トゥガルは学生が４つの村に分かれてホームステイすることになってました。私はベーシックの時にも滞在した村に泊まりたかったんですけど、ベーシックの時に同じ村に滞在した学生がもう１人、アドバンスドとして参加したんです。「やっぱ、アドバンスドの学生４人が４つの村に分かれて滞在しないとね。」ということになって、結局、私は以前、滞在した村とは別の村に行くことになったんです。だから私は『アドバンスドの学生』といいながら、初めての村に滞在する予定だったので、ベーシックと似たようなもんでしたね（笑）。

藤野：でも前年の経験があるから、初めて行く村でも何が必要なのかということは分かってたよね。

まゆは：そうですね。自分でマルチの種類とか調べたり、熱帯地域にこんなマルチがあるというようなことをバーっと調べたりして、それを一覧表にして。でも全部無駄になって。今、まだそれが家にあるんですよ（笑）。

山口真優葉
（ニックネーム／まゆは）

高知大学農学部暖地農学コースに在籍。国内SLは愛南（銭坪）サイト（愛媛県愛南町）、海外SLはトゥガル・サイトで活動。

小林：アドバンスドは達成しようと思ってるところが高いから、反省も多いんだよね。何が大切かというと、今、まさにここでやっているように「なぜ、うまくいかなかったか。」ということをみんなの前で説明できるということ。だから自信持っていいんだよ。

藤野：このプログラムの教員って活動に口出ししないでしょう？「なんか進みよるな、大丈夫だな。」と、教員は外巻きで見てるので（笑）。危機感を持ってアドバンスド同士が話し合って、インドネシア学生も一緒になって軌道修正していったというお話、聞けてよかったです。

“掘り下げる”の活動

藤野：昨年度の海外SLでは、『自分の関心事も掘り下げてみていく』というのも課題の一つにありましたよね。国内・海外での「掘り下げる」の活動はどうでした？

ゆき：私はアグロフォレストリーを見たくてインドネシアへ行ったので、活動しながらもずっとホームガーデンばかり見てましたね。特に植生は「絶対に見に行って、全部メモをとって帰ろう。」って決めてました。

もゆ：私は海外に行く気はなかったんです。しかも愛大に入ったのは、大洲で働きたいからで、愛媛県の大学、国公立大学、じゃあ愛媛大学みたいな考え方でした。大洲に一番近くて環境も似ているから高川サイトを選んで、高川で学んだことは大洲で生かそうと思って始めました。１年目の成果発表会の時、「私は大洲に住むので、高川には住みません。」と地域のみんなの前で言ったら地域の人に「もゆちゃんは大洲へ行くんやろ。」と一年間ずっと言われ続けて（笑）。でも、２年目は、自分でも分からんけど気付いたら、「私、ここに住むんやな。」って思ってて。２年目の成果発表会では「私はここに住みます。」って言ってました。実際、口にしたら自分もそんな気になってしまって。これはよく言うけど、

もし自分が蒋渕サイトに参加していたら「蒋渕に住みます。」、明浜サイトに参加していたら「明浜に住みます。」と言ってたかもしれん。結局SUIJIは、いろんな役割の中で、もちろんそれなりに頑張ったけど、それはきっかけであって、そこにゴールがあるとは全然思えなくて。「じゃあ、自分が高川のために空き家を改修して、そこで結婚して子どもを育てる。それが自分のゴールかな。」みたいなことを思います。ゴールというわけではないけど。

ちこ：私は（地域には）もともとすごく興味ありました。確か事前オリエン前に藤野先生と会って打ち合わせをしていた時「私、なんでSUIJIに参加したんやろ？」と改めて考えたんです。その理由の１つは、１年目の時にどのサイトのプレゼンも「この村は、やばい。何とかしなきゃ。」で、みんな同じに見えたんです。インドネシアへ行った時も「全サイト、ゴミ問題やん」みたいな。それがすごい嫌で、『この村の良さを見つけたい』っていうか、『良さを見つけられる人間になりたいな』と思って、それでアドバンスドとしてSUIJIに参加しました。

小林：今、ちこちゃんはいいこと言ってくれてて、問題や課題にばかり着目しちゃうと、どこも一緒になっちゃうんだよね。「インドネシアはゴミ、日本だったら過疎高齢化」という風にね。授業では、「課題解決のためには問題ばっかり見てちゃダメで、ポテンシャルを、可能性を達成するために何の問題を乗り越えないといけないかということを考えると、問題が乗り越えられるよね。」という話をしたような気はするんだけど、多分それはみんなの記憶にあまり残ってなくて、むしろ現場でなんか特徴付けを出してやろうというものの中に、『じゃあ課題とか問題じゃなくていいところを』っていうのが出てきたんだろうね。

ちこ：あと、実際にインドネシアに行って正直思ったのは、「やっぱり日本って素晴らしいところだな。」ということです。「地域住民をあと50人増やせ」と言われてもしんどいことやけど、「まだ数少なく残っている、頑張っている村を生かして、日本の自然のために何か出来ないか。何かうまいこと自然の力を生かしながら持続的な地域を作れたら、貢献できたらな。将来そんな人間になって日本を守れたら。」という理由で、私は今の環境科学コースに進みました。安田町の良さというか昔の人の知恵ってすごいなと思います。「そういうのはやっぱり残しとかなあかんな。」っていう事に気付かせてくれました。それに、山間地域が崩れたら、海も崩れちゃう。ほんまは山を守らないかんと思います。

まこ：私はそこにしかない土地の歴史についてもっともっと知りたいなと思います。例えば、明浜サイトでは空き家について活動したんですけど、パッと見たら人が住んでいそうなところでも、家の中は10年ぐらい前で時が止まっている。でも、そこには確かに誰かが住んでいたという形跡がある。それで「ここに住んでいた人はどんな人だったのか」と想像が膨らみました。明浜サイトでは『10年後の未来のマップ』というものを作っていたんです。本当はプラスの考え方にしたくてマップを作って地域の人に発表しようと思ってたんですけど、地域の方に話を聞くと「10年後って俺ら死んでるやろ。」、「10年後はこの辺は、もう３分の２ぐらいみかん畑ないで。」みたいな事を言われました。やっぱり学生たちだけで考えるのと地域の人の意見を取り入れるのとでは全然違うと感じました。

小林：なんで、まこちゃんはそれが（歴史が）おもしろいと思ったの？例えば、今、ここでそういう知恵を使うかっていったら使わないでしょ？

まこ：感性ですかね。ピンと来ました。街とか見ていると、うまく言えないんですけど『作られてる感』というか…。ある時に、駅ができて、住宅を建てて、ポンポンポンと人が入って生活してるように見えるんですけど、インドネシアや明浜って、そこに人々の暮らしがあって、それが何十年も何百年も続いてきたんだなっていう歴史を感じられました。あと面白いと思ったのは、インドネシアは日本人では考えられないような仕事をしてる人もいますよね。『ゴミ集めてお金にする』とか、「本当にこの人、これで暮らしていけるのかな？でも暮らしていけてるし。」とか。その不思議さ、思いもしないことが実際現実にあるから、それがおもしろかったですね。そういうのってネットで検索しても出てこないので。

ジョン：国内SLも海外SLも『島』に行ったのは自分だけなので、そこを着眼点として考えました。バラロンポ島って歩いて20分もすれば一周回れるのですが、そこに4,000人が住んでいて、

服部　純也（ニックネーム／ジョン）

愛媛大学農学部生物資源学科海洋生産科学特別コースに在籍。国内SLは柏島サイト（高知県大月町）、海外SLはスブルモンデ・サイトのバラロンポ島で活動。

活気に溢れてるんですよね。もちろんその中には貧しい人たちもいたりするんですけど、「昔の柏島もこういう風だったんかな。」と思いながら見てて。柏島は今でこそ人口400人くらいになっちゃったんですけど、30年、40年前は2,000人いたと聞きました。漁業が衰退していって今は400人で平均年齢も60代になっちゃったんですけど。どうしたら柏島がもう一回活気づくんだろうと考えた時に、やっぱり子どもや若い人の存在で地域は元気になると思うので、大事だなって思いました。

まゆは：銭坪サイトの対象は、ずっと『人』だったんですよ。地域住民同士に溝があるように感じて、そんな田舎の“込み入った”人間関係に興味があるというか、いいなと思って。アドバンスドの時は、「その溝が埋まりつつあるけど、ちょっとまだ遠い。若干遠いから村人同士を繋ごうか。」という目標を立てました。地域に入ると「今どき、こんな込み入ったやり取りしてるんかい！」みたいな人間関係がおもしろいなって思いました。ある町のある集落の会議に参加した時、びっくりするくらい誰もしゃべらないことがあったんです。そして、別のある日、今度は安田町のある集落の寄り合いに参加した時にはうるさいぐらいみんなが意見をしあって喋っていました。銭坪では、お互いが腹の探り合いしつつしゃべっているように見えて（笑）。そういう時に、私たち学生がその場にポンと入る

と、地域の方々は、「若い人がいるし、ちょっとカッコつけてみる？」みたいな雰囲気になって（笑）。和気藹々としてくれているのを見ると「おっしゃー！！」って思ったりしました。今、高知県大豊町でサークルの活動をしています。ある時、「あの人が●●したから、あいつとは口利かない」みたいなことを言っていた人が、半年後はあの時のことが嘘みたいに、仲が良くなっているのを見たりとかすると「あれ？」って感じになりつつ（笑）。それを掘り下げていくうちに、自分の中で「ぎこちない感じの人間関係があったように見えたのに、今はないように見える。どうして？」と、ひとりで考えたりしていました。

SUIJI-SLPへの提案

藤野：では最後に、今後のSUIJIへの提案や後輩に向けて「SUIJIプログラムは、こういう生かし方があるよ！」というメッセージをお願いします。

もゆ：「サイト期間を延ばしてほしい。」という意見が出だしたら、きりがない。むしろSUIJIプログラム後の「地域への通い」をサポートしてもらった方が絶対意味があると思う。私はそこに意味があると思っているから、今、全然関わりがなかった２コ下のベーシックの子たちと一緒に通っています。

ちこ：確かにそっちの方が私自身もいいと感じる。私は香川大学の「棚田の会」というグループに入って小豆島で活動していますが、私たちは（SUIJIプログラムで小豆島サイト以外で活動した学生たちは）地域の方々から見たら、“香川大学の学生さん”でしょうから、ただ単に活動して終わりって感じで。私と同じ安田サイトで活動していた高知大生の仲間が、安田町に行って活動しているのを知ると「ほんまは、私もハルちゃん（同じ安田町で活動した高知大生のメンバー）が今、活動している、ああいう感じの活動がしたいのに」と感じます。持続的に活動

貞松　千琴
（ニックネーム／ちこ）

香川大学農学部応用生物科学科環境科学コースに在籍。国内SLは安田サイト（高知県安田町）、海外SLはトゥガル・サイトで活動。

したかったら、プログラム終了後のフォローアップの方がいいかなと思います。

まこ：アドバンスドのさらに上っていうか、それを超えたアドバンスドだけでしたいことを思いっきりできるようなプログラムとかあったら嬉しいかな。アドバンスドの人間として２年間やってきたものを試せるみたいな。

ゆき：おもしろそう。

もゆ：PEP-BL（PPBL）？楽しかったもんね～。あの雰囲気で本当にサイトに２週間入ったら、全然違う質の学びはあるんやろなって思います。みんな、国内SLで、自分が活動した以外の他のサイトに行ったことある？私、愛媛の４サイトでは“ひとりSUIJI”した。柏島にも２回ぐらい泳ぎに行った。冬も行って。でも安田とか室戸とか小豆島は自分でフラっと行くレベルの距離じゃなくなっちゃうし、コネがないから行った所でただのよそ者に過ぎない。ショッピングに行く訳じゃないから。

まゆは：サイトに入って中盤から終盤の間ぐらいに、「農家さんとか村人への話しかけ方が分からない。」って相談されたんですよ。「え、今？」みたいな（笑）。地域の人と道ですれ違ったら、「こんにちは。元気ですか？今日は暑いですね。」と、その場で声をかけて、話す。田舎に行ったらそういうイメージがあるじゃないですか。きっと大学に入って自分の友だちと“つるんでる”生活で、知らない人の中に飛びこんでいく機会がなかなかないので、私もそうでしたが慣れるまでに時間が必要なのだと思います。アンケートを取りに行くといっても「こんにちは。すいません。年収いくらですか？」みたいな（笑）。いきなり本題に入って、ドン引きされて、何も返してくれないみたいなことがあって。それで結局、アドバンスドの学生が前に出るみたいな。だから“まみれる”暇もなく入って、やっと慣れたと思ったら「あと一日しかない」みたいな感じですね。ベーシックの学生に対して、地域に入る前にちょっと“軽くまみれる”みたいなものがあればいいかな。その辺の近所の商店街でいいから、一度経験しておくといいかも。

小林：ああ、そうか。ただ、今の若い世代の人たちが育っている環境が、見ず知らずの人と話しちゃだめっていうのがあるじゃん。そういう世の中だからこそ、大学でいきなりそういうところに入って、「何かやれ」っていっても難しいのかもしれないね。ホントは場数を踏んでいくしかないんだけど。

もゆ：だからSUIJIには２年目があるわけで（２回、参加できるわけで）、私はそれでいいかなって思ってます。ベーシックの学生に多くを求め過ぎたらいけんなと思って。自分たちも、２年経ってやっと出来だしたんだから。

ちこ：私は人を引っ張ることがすごく苦手ですごい悩んで、その後悔が今でも強くて。議論の作り方・進め方をすごく考えていた時に、「ファシリテーター養成講座」が開催されるのを知って、行ってみたんです。そこで、「議論の作り方、チームメンバーの話の聞き方、話の引き出し方、自分からの質問の投げかけ方」というのを学びました。グループが分裂したり、対立したりする時や議論で詰まった時に、少なからずスキルがあれば支えになるかなって思います。

ジョン：自分はSUIJIやってよかったなって思うのが、一生付き合っていけるような仲間に出会えたことかな。20年、30年後に同窓会するような仲になってるんじゃないかと思います。SUIJIってみんなから羨ましがれますね。そんなに仲いいんだって。

ゆき・もゆ：わかる！めっちゃ、言われる。「またSUIJIか」って（笑）。話が合うんでね。

ジョン：逆に大学で浮いてんだよね（笑）。

ゆき：浮きますよ、ホントに（笑）。「外国へ行って～」とか、こんな話していたら、浮きますもん。

藤野：（笑）。来年度以降のプログラムについて考えるのに、みなさんのお話、ご意見がとても参考になりました。これで座談会は終了です。ありがとうございました。

INTERVIEWER

小林　　修
愛媛大学SUIJI推進室・副室長

藤野　紀子
高知大学SUIJI推進室・特定教員

座談会に参加した教員たち

SUIJI-SLP教員座談会

SUIJI 5ヵ年を振り返って

SUIJIプログラムは事業開始から間もなく5ヵ年が経過します。SUIJI-SLPに関わる教員として、感じたこと、学んだこと、今までの活動を振り返りました。

印象に残ったこと

藤野：SUIJIプログラムは開始して５年が経ちますが、私は昨年度からの途中参加ということで関わらせてもらいました。はじめに思ったのは、国内・海外SLで学生たちが自己評価する際に使用する「５つの力」のシート。項目が細かく検討されていて、すごいなと思いました。

島上：あれを作れたのがひとつの成果ですよね。プログラム開始当初のシートは、「７つの力」だったのですが、１年やってみて、学生たちが「地域の課題解決をせねばならん」とすごい力が入ってしまっていて、「これはいかんな」と思いました。地域をよく知らないのに課題解決できるわけがない。地域をしっかり見る姿勢や力を養うにはどうしたらいいのか。プログラムの目的に立ち返って話し合い、「まみれる」とか、「掘り下げる」とか、少しずつ言葉になっていきましたよね。「じゃあ、どうやって評価すればいいのか」が次の課題で、教員それぞれが意図するところを具体的に出し合って項目を整理していったんですよね。

小林：「地域に入る時、地域の人と学生が関わるときは、こういうような学生の姿勢が必要だ」と議論しましたね。

田島：教育プログラムとして運営して進んできた点で、非常にオリジナルな内容を結果的に作っていったのが良かったと思います。

頑張れる学生

笠松：SUIJI-SLPには、結構、頑張るタイプの学生が積極的に参加してきているのです。そうすると、当然、頑張れば頑張るだけ成長が大きくなって、こちらが提案した以上のこともある程度こなしてくれるというところがあったと思いますね。

松村：私は最初「サービスラーニングは、どうやったらいいのか」と自問自答で地域に入っていきました。とにかく教員が一生懸命やれば、学生はついてきてくれるという考えでやってきました。最近、振り返ってみると、学生は自分なりにやることをきちっと考えてこなしていくし、先輩や友だちから聞いて、SUIJIプログラムに参加してくる学生も多くなりました。SUIJIを履修した学生は農学部のソフトボール大会や収穫祭などに参加しているのですが、先輩と後輩の繋がりができ、SUIJI経験者の層が厚くなってきました。

藤野：学生の口コミで「SUIJIプログラムに参加してよかった」と思う学生もいますけど、「自分が思っていたSUIJIとはちょっと違っていたな」と思って国内SLだけで終わる、いわゆる途中離脱する学生もいて…。一人ひとりに離脱した理由を聞くと、反省点はありますね。

異文化理解

ルース：「異文化への対応」、それもひとつの課題でしたね。「互いの理解・互いを理解」というのもSLの目的の一つでした。日本学生は「インドネシア人は遅刻する」と言いますが、自分達も遅刻しているのにそれを全然見ていない。逆にインドネシア人も理解すれば、時間通りに来ますよ。でも、どうも日本学生にはそれが見えていないというのが問題ではないかと思います。また、インドネシア人には「日本人はディスカッションが長すぎる。丁寧すぎる。完璧にしすぎる」と見えています。SL期間中は、このようなことがありますが、どうすればもう少し「互いの理解」につながるのか…。

藤野：ある学生から聞いた話ですが、インドネシアで海外SLを展開するときに、国内SLに参加したインドネシア学生が、「日本でのSLでは、スケジュールがきちっとしていた」といって、張り切って時間通りにスケジュールを組んでいたらしいのです。ところが現地での活動中、アポを取っていた訪問先にいざ行ってみたら、「おじさんがいない！」とかいうことがあったそうです。そこでインドネシアの“キラキラ文化”を知っている日本のアドバンスド学生が、「これはインドネシアのやり方とは、ちょっと違うよね？いかんよね？」ということに気付いて、インドネシア人スタイル（時間のスピード、生活スタイル）でやっていこうっていう風に途中で変えていったそうです。

ルース：すばらしい。

小林：それはさっきルース先生が言っていた、異文化理解を自分の行動に反映させた一つの例かな。

ルース：そうですね。「インドネシア人はどうして遅刻するか」。学生によっては「時間は大事なのだけど、友だちの方が大事。だから時間よりも

バージン・ルース
愛媛大学SUIJI推進室・室員

友だちのほうが（友だちを待つことのほうが）優先される。日本人は時間が大事」ということがあるのかもしれません。もちろん、SLでの活動は周りが（地域が）関わるので、やっぱり時間通りに動かないと迷惑になることもあるんですけどね。

笠松：この話はですね、「異文化の理解」とか「時間を守る」ということも含めて「慮る」ということなのですよね。日本人の言動を見ていると、その点をすごく感じます。地域の人がやっているってことに対して思いを共感できないっていうか、その人の立場に立って感じることが難しいようですね。「相手がどう思っているか」というところの立場に立てないから、時間についても地域の人の立場についても共有ができないのかなと思っています。

田島：日本の学生でそういう「相手を慮れる人」っていうのはかなり少ない。それが異文化を理解するときの懐を非常に狭くしている。単なる知識じゃなくて相手を理解したいという熱意、また違うことに対しての耐性。それに耐える力というか、その点で日本人はやっぱり弱いなと思います。

田島　茂行
香川大学SUIJI推進室・特命教授

ルース：イスラム教のことは、日本学生が結構、気を遣っていたね。

アビディン：それは私も非常によかったと思います。例えばイスラム教の「ハラール」ですが、日本人はインドネシア人と一緒にこのプログラムに

アビディン・ザエナル
ボゴール農業大学　助教
（元愛媛大学SUIJI推進室特定教員）

参加して、「ハラールとは何か」を少しずつ少しずつ理解していきました。私は国内SLの前にインドネシアの学生に「インドネシアの学生が日本に行くので、日本側でちゃんとハラールについて調べていますよ。」と話しています。これはすごく大事な異文化理解だと思いますね。また、イスラム教徒は一日５回お祈りしますが、お祈りの時間には「先生、もう時間ですよ。」とよく声をかけてくれた。みんな非常にイスラム教について分かってきています。そしてもう一つ。食事の時、日本では食べる前に日本語で「いただきます」、インドネシアではインドネシア語で挨拶をしていました。これも非常によかったです。

アドバンスド学生の役割

島上：このプログラムの特徴の一つは、アドバンスド学生の役割ですよね。アドバンスドの学生たちがいるから色々な附随する自主活動も展開される。これはすごい仕組みだと思います。

ルース：アドバンスド学生がティーチング・アシスタントの様に参加できる体制があるといいと思います。出来たら継続して参加して欲しい。

増田：年毎で地域を移っていく事について、アドバンスド学生の経験が翌年に活かせないから反対する意見もあり、私自身もそうです。その一方で、

アドバンスド学生のノウハウはどこに行っても汎用的に使えるのではないか、という意見もあります。ただ、地域の方々との人間関係や信頼を一から築いていかなくてはならないので、なかなか大変だとは思います。

アビディン：今年の国内SLには、既にアドバンスドを終えた学生たちが自主的に来てサポートしてくれましたよ。

笠松：アドバンスドを終了した学生の「発展系」ですが、何らかの位置付けを、例えば3回生のうちに取得する授業として位置づける可能性もありますね。

小林：オン・ザ・ジョブトレーニング的なプログラムを次のプログラムで考えてもいいですね。

島上：「アドバンスドの学生たちだけで一緒に何かやってみたい」と、アドバンスドの学生が言っていました。それぞれのサイトで経験したいろんな知恵を、みんなで実践するというのは楽しいと思います。

ルース：学生それぞれが違う専門をもち、集まるというのもすごくいいことだと思う。その専門のやり方、視点で繋がればいいと思うけれど、新しいプログラムをまた作るとすれば大変ですよね。また、学生にはそれぞれの専攻のプログラムがありますからね。副専攻や独立コースとして作ることが理想ですね。

地域との関係・学びあい

小林：それでは次に、地域の人を「慮る」とか「気遣い」について。「地域の学び」という話もちょっと掘り下げたいと思います。

松村：最初は小豆島町へ、断られつつ受け入れをお願いに行ったんです。３年目、学生による小豆島中山地域の皆さんへの年度末報告会で、町の担当職員の方が「はじめは小豆島に『香川大学が来る』っていうから、上司から『受け入れなさい』と言われて…最初は遊びに来るのだろうと思っていた」と話されました。「でも３年目に入って、小豆島サイトで学生が地域の方と仲良くなって打ち合わせをするようになると、『これはちょっと（遊びとは）違うな』というのに気がついた。」と職員の方から聞いた時に、私は「あぁよかった」と思いました。今年の国内SLも地域の人とどうやってふれ合い、まみれていったらいいのかということをアドバンスド学生が悩んでいました。自分で模索しながらチャンスを探している、自分たちにやってもらいたいことを乗り越えて地域の人とコミュニケーションをとれるようになったっていうところがいいのではないかなと思います。

島上　宗子
愛媛大学SUIJI推進室・副室長

島上：銭坪地区は、別の授業の学生たちとSUIJI国内SLが本格的に始まる前の年度の２月初旬に行ったんです。その時、地域の方々がものすごく対応してくださったんですよね。今から考えると地域総動員でお餅つきをして、お寿司を作り、歓待してくださって。銭坪でやるのが自然な選択肢という印象を持ったので、受け入れをお願いに行きました。そしたら「負担である。来られてもうちの地域じゃ何もできませんから受け入れられません」ということをまずおっしゃられて。ですから、地域の方に何かしていただきたいと思っているわけではなく、「学生に現実を学ばせてください、その場所として受け入れていただけませんか」というような言い方をしました。一緒にやっていく中で徐々に、大学が何かすごいものを持ってくるわけでもなく、地域の側も何かすごいものを準

備しなければならないわけでもない、ということがお互いに共有されていきました。学生は一軒一軒訪ね歩く中で学んでいく。一方、地域にとって学生が来るのは一瞬の風が吹くような小さな変化だと思いますが、「あぁ、こういうやりとりも一つの学びの形なんだ」ということにお互いに気付いていったという感じがするのですよ。学生にとっては初めて訪ねるお宅の玄関をコンコンとするのでさえ、ものすごいエネルギーがいるわけですよね。銭坪地区と浜地区の全世帯を廻ろうって学生たちが計画を立てて。断られるかもしれないけど出てこられた方の反応を見て、その反応に一喜一憂する。それはすごいコミュニケーションなのだろうなって思います。それが自信になるっていうか。

藤野　紀子
高知大学SUIJI推進室・特任助教

藤野：インドネシアの学生に助けられているとすごく感じます。高知の県民性もあるのでしょうか。地域の方は日本語でインドネシアの学生にも話しかけていく。「兄ちゃん、何歳？」とインドネシアの学生に対してもそんな感じでしてね（笑）。そして地域を出る日は、地域の皆さんも学生も涙、涙のお別れです。地域の人たちは「教育の場として（地域を）どう提供したらいいだろうか」という視点を持っていただいているというのは感じましたね。

小林：日本の地域で活動する時に、外国人がいるっていうことがひとつイベント性をもって地域の人を巻き込みやすくなるっていうことはありますね。

田島：インドネシアの学生は、「日本の地域というのはおじいさん、おばあさんばっかりだ」ということをそもそも体験してないじゃないですか。おじいさん、おばあさんは、平安で安全で快適な生活を維持したいと思っているのに、その時にインドネシアの学生が「道を広げましょう」とか「観光客を増やしましょう」とか見方が全然違う意見を言う。「ロンドンのような２階建てバスを棚田に走らせましょう」とか言うと、地域の方にすれば「なにそれ。」という感じになるのだけど、結構そういう形でディスカッションして、いい勉強になると思う。日本学生はそういう発想になかなかならないですから。

ルース：蒋淵サイトでは今年、地域の人たちはすごくリラックスして、やっぱり「教育をどうやってしよう」と考えてくださり、SUIJIの学生の受け入れに慣れてきたというのを感じました。これはすごくいいことではないかと思いました。

笠松：他のサイトでは地域で泣かされた学生がいて。日本学生がいろんなことを考えて提案したのに、地域の方から「出来もせんことを提案するな」というようなことを言われたのですよ。それで「自分たちがやってきたことは一体なんだったのだろう」ってことで、“シュン”とした場面があったのですね。地域との関係を悪くしたというよりは、それも学びの場だと捉えるかどうかですよね。

藤野：それは海外SLに参加した、ある日本学生も言っていました。インドネシアに行って、農家の方が「私たちは君たちよりも何十年もの経験があるのだ。君たちは農業をやってないだろう」と言われて、「ああ本当にそうだな」と思ったそうです。

田島：小豆島でも最初の年はもうほとんど五里霧中でやっていて、２年目、３年目ぐらいから学生が4月の水路掃除に十数名動員して参加するのを続けています。現地の人から見るとかなりしんどい作業を学生がやってくれるということがありがたいようで雰囲気が少し変わりました。地域への関わり方も段々進化したのかなと。

小林：長く付き合っていく過程で、地域に継続的に応えていくのがすごく難しい。

小林　修
愛媛大学SUIJI推進室・副室長

笠松：それは大学の学びの方になるのかもしれないのですけどね。サービスラーニング期間中のことだったら、例えばSUIJIの10数日以外の355日の方が大事ですね。そこにいかに関わるか、継続出来るかどうか。

島上：そこをどうしたらいいのかですよね。

小林：サービスラーニングの後の自主的な活動を、例えば「何時間以上やったら単位あげます」みたいな授業があってもいいかもしれないですね。

アビディン：学生自ら「何かやりたい」という方が、もっといいんじゃないかな。

小林：自主的な活動ってすごくいいのだけど、大学が関知しない部分の動きになってしまうので、学生が自己責任で動かなきゃいけないですよね。SUIJI-SLPのいいところ一つは、日本に「インターナショナル」を持ち込めるという仕組みで、よくルース先生と「国内SL的なものを全学でするといいよね」と話しています。

田島：このプログラムのひとつの特徴は、１年生とか２年生の大学に入ってきた直後のイメージで地域に入って、そこで６大学の学生と合宿しますよね。これが彼らの人生観を決めるような原体験を作っていくと思います。これが大きいイニシエーション学習だと思うのですよね。香川大農学部にはもう一つ、高学年向け国際プログラムがあるのですけど、そちらは専門知識ベースで実践的に学ぶ内容です。このSUIJI-SLPは、お互いの友情とかお互いの団結心とか、そういうところに寄りかかって、頑張りたいという気が出て来るわけですよね。

学生・教員・地域のお互いの関係

増田：サイトでは結構、「今年の学生はこう、去年の学生はこう」と比較されます。また、学生たちがいろんな家を廻ってインタビューすると、地域の方から「毎年同じことを聞かれるのか」とも言われることがあります。その一方で、学生たちには自分自身で新しく切り開いてもらいたいという思いもあるし、情報のなかには個人的なものを含まれていることもあります。ですから、これまでの学生たちが蓄積した地域の情報を次の学生とどのように共有していくのがよいのか、頭を悩ませています。また、別の地域では、地域の方々が地域おこしの取り組みは昔から主体的に実施してきたのですが、どの方々も高齢となり、「身体がしんどいので、新しいことを提案してくれるな」という地域側の声を地域のコーディネーターを通じて聞いたこともあります。そうしたこともあり、今年の学生は、自分たちは地域を一時的に楽しませるエンターテイナーになるとか、写真コンテストみたいなことをするとか、そういった方向にし

増田　和也
高知大学SUIJI推進室・副室長

たようです。

小林：「大学の世界展開力強化事業」の中間評価の課題としての指摘で、「サービス」と「ラーニング」の定義の問題。これはおもしろい質問だなと思っていて、グローバル人材養成プログラムの中でSUIJIとしてどうプログラムを適応させていくか。学生個人の個性は当然毎年違うけれど、グループとしての性格が出来てくるっていうのがおもしろいなと思っています。

笠松：教員の関わり方が難しいですね。まだまだ答えは見えてないですけど、放っておいたら「学生だけで出来たね」で終わってしまい、活動レベルとしては高まらない。出来たつもりになっても、本当はもっと知らなきゃいけないことがあるし、頑張らなきゃいけないこともある。

笠松　浩樹
愛媛大学SUIJI推進室・室員

ルース：サービスラーニングは、期間・時間が短いから、最初に教員がもっと言うべき、教えるべきだと思う。学生が気付くというのもあるけど。

藤野：私もルース先生と同じ意見です。始めに教員は学生に対してプログラムや各サイトでの活動の方向性は示しておく必要があると思っています。それから先の進む方向、進みたい方向は学生に任せます。あとは要所要所で「学生は、つまずいていないか？」ということを確認しています。

田島：地域おこしという視点から、６次産業化という方向を現場で学生に実感してもらうことを当初企画したのです。担当した地域では「６次産業化よりも棚田を維持することが大事」という状況がありました。また、学生は農村歌舞伎を地域全員参加で維持していることに惹きつけられる現実がある。農村歌舞伎は、主婦の方から何からいろんな職業の人が200人ぐらい裏方も入れて参加するわけですからね。

小林：このプログラムの特徴は、毎年変わる学生の個性、地域の課題をくみ取りながらプログラムを進化させていくところにありますね。

増田：学内の別の教員からは、新しいところを新規開拓して毎年サイトが変わるようなパターンや、数年のブランクを置いて一定のサイトでお世話になるパターンもあるという意見を受けています。ただ、サービスラーニング終了後のサイトとの長期的な関わりや経験の蓄積といったことを考えると、私自身はこの意見には全面的には賛成できないのですが。

小林：プログラムの髄の部分は多国籍プログラムですから、地域が移っても、そこの新しい学びからスタートっていうのもあり得ますね。実際、愛媛大学は愛南町と西予市から支援をいただいていて、他の地区への展開のご要望をいただいたことがあります。どうやって対応できるかなと前向きに考えたましたが、地区数が多い自治体の場合は対応が難しいですよね。

自分にとってSUIJIとは？

小林：では最後に、先生方ご自身にとってこのSUIJIとは何だったかというのを一言お願いします。

笠松：自分が受け持っている中で一番刺激的な授業であることは間違いない。学生と教員という関係よりも、学生と一緒に考えないといけないからそういう意味では鍛えられますね。これは教員にとっても成長科目だなと思います。

田島：学生のイニシエーション的活性化、学生がどんどん好奇心を増やして元気になる、そういう教員としての原点を楽しみました。

ルース：SUIJIはやっぱりパワーがある。異文化の中で、「このグループで一緒に活動をやらないといけない」というのが、すごく強い動機づけになるのですね。

松村　幸江
香川大学SUIJI推進室・特命講師

松村：私は学生と触れ合うのは初めてでしたが、私自身が参加したJICAの青年海外協力隊時代の同期と触れ合ったのを思い起こしながら、自分の社会経験も学生に伝えられたらいいなと思いました。良い学生たちに恵まれてすごく良い時間が過ごせたなと思います。

藤野：SUIJI-SLPのように「現地に行って、あるもの探しをして、その後に色々な活動をする」ということを「教育プログラム」として実施していく難しさを感じています。私は以前から学生が地域でフィールドワークを行うことのコーディネートなどはしていたのですが、SUIJIは大学が実施している教育プログラムですから、この科目を履修した学生にとってどういう影響があったのか、効果があったのかというのを考えないといけないと思っています。

増田：私も学生に伝えることの難しさを知りました。私にとってフィールドワークのおもしろさというのは、まず現地に出かけて行き、そこで自分なりの発見があって、それを深めていくなかでますますおもしろくなる、というプロセスなのです。それを学生に伝えたいなと思っていたのですが、学生の個性や関心、視点もまちまちですし、まだまだ上手く伝わっていないと感じています。

アビディン：みんなと同じ気持ちです（笑）。あと、SUIJIはやっぱり生き物です。生き物みたいだから、SUIJIも私の人生です。学生の成長を見るのは本当に楽しい。

島上：私にとって、日本とインドネシア、農山漁村、フィールドワーク、それと関わって自分はどう生きるのか、この4つは私のライフワークだと思っています。だから「こんなプログラムを愛媛大学が作ってくれて、本当にありがとう」と言いたくなるようなプログラムなのですよ（笑）。すごいやりがいがあります。だからこそ難しい。

小林：実は、SUIJIプログラムは私が担当する「環境ESD」というカリキュラムでは出来なかったことを実現するチャンスだと思いました。「環境ESD」のカリキュラムは、地球全体のサスティナブルな暮らし方を考え直そうというものなのですが、そのためには海外に行っていろいろ経験をしないといけない。SUIJI-SLPは、毎回多くの教職員、地域の方、そして６大学の100人以上の学生と関わることができるということで、これが楽しかったし、チャレンジングだった。今後自立するプログラムにするためには予算の確保が必須ですね。予算が十分に確保できなかった場合でも、以前アビディン先生が言っていたように、予算がないからと思考を停止するのではなくて、予算内で最大限効果をあげる方策を練る努力をしていきたいと思う。

　このプログラムでの僕たちの仕事というのは未来が残せる事だと思うね。５年後、10年後の未来をイメージしながら教育活動が出来るというところが特にすばらしい。未来を担う学生が成長していることを目の当たりにできることが、プログラムを運営・継続する上で何よりの成果ですし、励みになりますね。

お金で買えない三年間

愛媛大学　法文学部　総合政策学科　公共履修コース
深堀　景應
明浜サイト・トゥガルサイト（平成25年度、平成26年度）

私は高校時代、将来の自分はどうなっているのか、将来の夢や目標を一つは持っていなければ立派な大人になれないはずだという謎の恐怖症を患っていた。また、当時は野球部でもレギュラーの選手ではなく補欠要員だったことで自分は人に必要とされているのだろうかという不安感や、姉がNGO職員として途上国で働き始めたということもあり、日本とはいわず、世界で誰かに必要とされる人になろうという漠然とした思いを抱えていた。大学一年生の夏には姉が勤めている東ティモールを訪問し、自分は国際協力者の第一歩に踏み出したと考えていたが、「君の人生や時間をこの国に捧げられるか」という現地NGO代表の方の一声で私の夢は意気消沈してしまった。

帰国後は何かをしないと不安でたまらない、バイト、サークルといった大学生らしいものに没頭する４年間ではみんなと同じでつまらないという思いが強かった。そんな時、初めてできた同年代のインドネシア留学生の友人との出会いがきっかけでSUIJIを知った。日本とインドネシアの地域で貢献できる、誰かの役に立って誰かに認められたい自己承認欲求の魔法から逃れたいという思いもあって受講を決意した。

国内、海外ともに二回参加したが、その時に学んだことは「気遣い」「共感しながら行動すること」である。

SUIJIでは日本学生、インドネシア学生を含む団体行動が基本になり、学生たちの意見やアイデアなどをまとめたり、学生の性格などを考えながらその人に合った役割を分担すること。さらに地域の人たちともコミュニケーションを取りながら二週間過ごすので、気を使って周りを見る力がついたと感じる。「共感しながら行動すること」はSUIJI期間中、インドネシアの先生から学んだことだった。地域に対して同情(かわいそう、大変そう)する気持ちで終わるのか、相手と同じ目線に立ち、地域の人の気持ちに共感しながら行動を起こしていくのかというお話から共感というワードを意識するようになった。SUIJI終了後、私はインドネシアの地域に入ってゴミ問題を解決するというテーマで留学を決意した。この留学がきっかけで共感するという言葉の意味を少し理解するきっかけになったと思う。来る日も来る日も地域に通い続け、用事がなくても挨拶やおしゃべりをしに出かけていった。すると、ある時いつも仲良くしてくれているおじさんが「ケイオウ、地域のみんなが環境をキレイにしようと思うようになるにはどうしたらいいかな」と話し始めた。時々ゴミ問題やその対策案の話を自分からすることはあったが、その時初めておじさんの方から話をしてきた。私はとても嬉しいと感じた。国内のSUIJIでは、学生が地域の、それも年上の人に助けてもらいながら過ごしたので、自分より年上の、しかも外国の人に頼られたのは初めてのことだった。

自分の奨学金を元手に友人の学生たちと協力しながらゴミ銀行という地域のゴミをリサイクルして換金するシステムをみんなで作り、結果３か月間地域の人たちに「頑張ってね！」と言われたり、中国人みたいなやつがこんなところでなにやっているんだという冷ややかな視線を感じながらも、完成させることができた。同情ではなく、相手の気持ち（宗教や文化的な面）を汲みながら共感して行動すること。上から目線ではなく、食卓目線（ごはんを食べながら目を合わせたらいつもよりハッピーな気持ちになるから）でゴミ銀行をみんなで作りあげることができた。一年後、その地域を再び訪れたところそのゴミ銀行はさらに外観を綺麗にした状態で継続していた。訪問時には地域の人たちのただでさえ大きな瞳が私を見つけた途端、さらに大きくして私の名前を嬉しそうに叫んでくれたのは今も忘れられない。

国内SLの明浜サイトでも、地域の方から連絡があり、「ケイ、次いつくるの？みんな待ってるよ」と声をかけてくださる等、より深い関係性を築くこともできた。

SUIJIに参加してから一生ものの人間関係ができ、誰かに認められたいという自己承認欲求の魔法も今は全く気にしなくなった。この授業がきっかけで悩みや大変なこともあったが先生や友人、後輩に支えられ、今ではこれまでの人生の中で大学生活が一番楽しかったと胸を張ることができる。そして、愛媛の明浜をはじめ、インドネシアにも帰る場所があるのだと私はおじいちゃんになっても色んなとこで自慢してやろうと思っている。

SUIJIでの経験と自らのステップアップ

香川大学　農学部　応用生物科学科　環境科学コース
請川　雄哉
小豆島サイト・ボゴールサイト（平成26年度、平成27年度）

私は、高校時に修学旅行としてアメリカに行った。人生初の海外でスケールの大きさを感じ、もっと広い世界を知ってみたいと考えるようになった。大学生のうちに海外経験をしたいと思い、インドネシアで学べるプログラムSUIJIに興味を持った。結果的に国内SLを知ったのはSUIJIに応募した後で、小豆島サイトを選んだ理由は出身である香川県の地域活性化に関わりたいと考えたからだ。

国内SLを通じて人のつながりの大切さを肌で感じた。地域の方には、初めて会った私達大学生や、インドネシアの学生に対して優しく接していただき、「村を知って楽しんでもらいたい」という気持ちが伝わってきた。SUIJIに対して「海外を知れる、海外で学べる」といった期待が大きかったが、国内SLに参加することで日本人として、人と関わっていくことの重要さを改めて理解することが出来た。

国内SL小豆島サイトは、地域課題である過疎化解決に向けた活動を行った。私は活動の際に地域にとって何がいいのか、どう貢献できるかを常に考えていた。しかし、懇親会で地域の人と話をした際に、「SUIJIの学生が楽しんでくれたら一番ええ」と言われたことに驚いた。その時、私は嬉しく思うと共に以後の活動について深く考えるキッカケとなった。学生が楽しみつつも地域に貢献できる、また、素晴らしい地域の方々と継続して関わっていけるような持続的な活動を行う必要性を感じた。

私は2014年度（１年生の夏）の国内SLからSUIJIに参加した。初回の国内SLではSUIJIのことも小豆島のことも知らず、英語も全くできなかったため、リーダーに従って活動を行うばかりだった。その反面、インドネシア人と積極的にコミュニケーションを取り、活動を先導していく先輩を見て、それまで感じたことがない程のうらやましさと悔しさがあった。自らの能力不足を実感し、その後の大学生活でするべきことを明確に知ることが出来た。

２回目の国内SLは２年生時にアドバンスドとしての参加だった。初回の国内SLから継続して行っていた地域の人との交流や、海外SLPでの経験を基にアドバンスドとして活動を先導でき、自信につながった。SL参加前から次のステップ（インドネシアへの長期留学）について準備しようと考えていた為、国内SLで先生方やインドネシア学生と目的を持って関われたことはとても良い収穫となった。

現在私はインドネシアで１年間の留学を行っているが、国内SLに参加して得た経験、コネクションや感じた悔しさなどが長期留学に確実に繋がっている。自ら考え次のステップに移るため、とても意味のあるプログラムに参加できたと感じている。

インドネシアでNGO活動

SUIJI-SLPを通しての挑戦

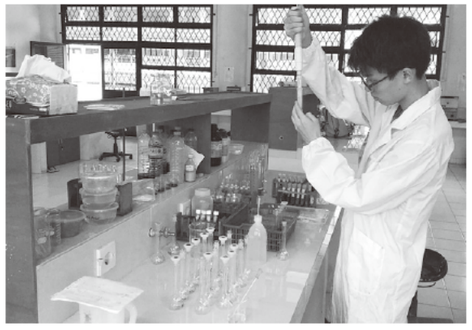
高知大学　農学部　農学科　食料科学コース
朴　　智徳
蒋淵サイト（平成25年度）、室戸サイト（平成27年度）
ボゴールサイト（平成25年度、平成26年度）

最後のSUIJI-SLPに参加してからすでに一年以上経った。私は平成25年度のベーシック国内SLで蒋淵サイトに参加し、海外SLではボゴールサイトに参加した。その後、自分の英語力のなさを痛感しフィリピンへと語学留学したのち平成26年度のアドバンスド海外SLで再びボゴールサイトに行き、平成27年度のアドバンスド海外SLで室戸サイトに参加しすべてのSUIJI-SLPを終えた。今思うと非常に充実し、そして自分を成長させることができたSUIJI-SLPであったと思う。

私がSUIJI-SLPに参加した動機だが、高校生の時に土壌、特に土壌汚染に興味を持ったのがきっかけになっている。そして、高校の化学の先生から東南アジア諸国のような発展途上国のような国々で土壌汚染が深刻になっているという話を聞き、大学入学後は東南アジアに留学し土壌汚染について学びたいと感じた。そして大学入学後、幸いにもSUIJI-SLPに出会いインドネシアに行き、インドネシアについて学ぶ機会を得た。

SUIJI-SLPに参加してインドネシアについて学ぶ中で様々な驚きや経験を得ることができた。特に一番初めに参加した国内SLでは、インドネシア人の時間についての考え方に驚き、悩まされた。日本では時間通りに行動することが当たり前となっている。５分前や10分前行動などについては小中高で先生から口を酸っぱくして言われた。しかし、インドネシアではそうではない。スケジュール通りに進まないため、私は最初このことについて非常に悩んだ。だが、インドネシアの子に聞くとインドネシアでは遅れている子を待って一緒に行動にすることが当たり前と言われた。日本とインドネシア、それぞれの「普通」は異なる。頭では理解していたことだが、実際に体験をしてこのことを改めて学んだため強く印象に残っている。

SUIJI-SLPに参加しなければ、インドネシアと日本の違いについて学ぶことはなかったと思う。自分の英語力のなさを痛感しフィリピンに語学留学することはなかったと思う。そして何より、いま現在ボゴール農業大学にてインドネシアの伝統的な染物であるBatikによる水質汚染について研究をしていなかったと思う。私にとってSUIJIとは経験と機会を得る場であったように感じる。今後はSUIJI-SLPと留学で得た経験を生かして、SUIJIに参加する後輩や高知大学に留学してくるインドネシア学生のサポートをすることができたらと考えている。



ボゴール農業大学の実験室にて

SUIJI-SLP Experience

Faculty of Agricultural Technology, Gadjah Mada University
Bedri Sekar Nurmadhani
Ainan (Sotodomari) Site (FY, 2016)

SUIJI-SLP program learnt me about many things, particularly on Ainan Site. My site is Ainan-cho on Sotodomari village which has wall stone (ishigaki). There, I and the other members joined Zizoubon festival, Toro-nagashi, and also did wall stone making (ishizumi).

When we did ishizumi with local people, we learnt how to arrange stones to become ishigaki. Nowadays ishigaki can be one of tourism place in Ainan Cho. Then, on the other day we joined Zizou Bon festival and Toro-nagashi. Zizou Bon is a festival which held every summer in Sotodomari. In this festival, people are dancing and singing on a circle, then other people giving towels, snacks, and beverages. While Toro-nagashi is a ceremony to pray for passed away people in this year. This ceremony started with driving boat to Kashima, an island near Sotodomari, then waive toro to the sea. The next day, we had an event with 7 Minamiuwa High School Students. From these activities I understand the characters of local people, how to communicate with others, and know about Japanese lifestyle.

People in Sotodomari almost all elderly. The number of houses and people in Sotodomari are always decreasing because younger people moving to the city to earn money or study. And sometimes, those people are not coming back until they get old. This situation happen apprehensively. The village should not be only a place to spend the old days, but also be a place to work or treat the resources there.

By joining SUIJI-SLP Program, I'd like to be a better person for myself, my neighborhood, and my country. Japan is famous with its modernity, included being modern on how they manage garbage, traffic, and the good characteristics they have. They also apply local wisdom that can be develop as the time being. Japan is also famous with the beauty of its culture and places. By joining this program, I can see with my own eyes how beautiful Japan and all the things it has. I also want to imitate all the good characters they have and apply all those good things in my life to make changed for my neighborhood nor my country.

Japan, which also Asian, has different culture, life style, and habit with Indonesia. Japanese are always being punctual in every situation. With appreciating time, we will make more worth things. Japanese also more careful and their responsibilities are high. Now after joined SUIJI-SLP Program, I'd like to have those characters on myself. Because those characters are good enough to be had and simple but applicable in every situation.

To Become a Servant Leader

Bogor Agricultural University
Muhammad Naufal Rauf Ibrahim
Komobuchi site (FY, 2013), Tegal site (FY, 2013)

It was a great opportunity to join SUIJI-SLP both in Japan and Indonesia. When I joined SUIJI-SLP, I was so impressed with the idea about being a servant leader. To become a leader that serves the people and aware their problems also their potentials. This kind of leadership is rare among peoples, and this program helped me to find a way to become a servant leader by learning and service to the communities in the rural area.

With Indonesian and Japanese friends, we came to Komobuchi on summer season at 2013, and I was very surprised. Komobuchi is very beautiful and I really excited to do service learning in there. We did so many things like creating the potato field, opening café, and joining Bon-odori festival. But the most thing I learnt is when we talked to villagers and started to understand their problem in Komobuchi site. When we are leaving the village, I was grieving because I could not interact much to them.

When the Japanese came to Indonesia and started the activities in Tegal site at 2014, my Japanese friends were very surprised especially about waste management and the number of children in the village. In Tegal site, there is a garbage management called "Bank Sampah", which allowed you turn the garbage into money. Also in Japan, the numbers of children in the village are relatively few. By borrowing the Japanese point of view, I started to see the around in the different way. This was probably my start to understand how to become a servant leader.

Not only that, by joining this program I could make friends with students from Japan. They are very funny, helpful, and active. I am very enjoyed every moment I talk with them. They are also helping me to studies Japanese, thanks to them I able to passed JLPT N2 test.

After I am graduated from Bogor Agricultural University, I continued my study in Kyushu University. Vast experiences I got from SUIJI-SLP were very helpful so I could go to Japan as a master student. Looking for forward to meet my friends in Japan and visit Komobuchi again!

The Contributive Experience of SUIJI-SLP

Hasanuddin University
Muhammad Taufik Gaffar
Kashiwajima site (FY, 2013)

SUIJI-SLP is a program that is very pleasant and helpful. During the course of the program, I learned a lot about rural conditions in Japan, especially in Kashiwajima. The program is filled with social activities involving not only students, but also the local community. Our presence in Kasiwajima was warmly welcomed by the local community. I was very happy when doing activities, because the enthusiasm of the committee and the community in supporting of our activities was so great and full of hospitality.

In my activity and interaction, I am also practiced for more open mind and flexible and to strengthen tolerance, because the participants of the program are from Six universities origin of Two different countries which are have so many differences in both languages, customs, and cultures. It was very important to adjust quickly and adapted to interact with someone else. In fact, although the diversity of differences, we were able to complete the programs as well as we planed. Cultural differences make us want to exchange information about our own culture, therefore we make a night of culture and inviting local people to come on the show. Not only chatting, but in the event we also made a typical snack from Indonesia and dancing together.

During three weeks with other students, unpredictable feeling increasingly bonded as a friendship, many things we did together well it's sad, or happy, we were always together. That's why we were so difficult to say goodbye each other.

Lots of experience I have gained during the program. In addition to finding new friends and experiences, indirect communication skills and my confidence increased, and that's what I keep in my daily life, both in the sociable environment, and the work environment.

I am currently working as a staff of administration and finance at one of the companies belonging to the Government of Indonesia which is engaged in the Staple Food. In addition, with this experience, I was entrusted by the company to represent conduct Supervision staple food in India for one month.

I really hope can join with SUIJI again and meet up with friends in Japan. SUIJI-SLP is a really valuable to me. Thanks SUIJI.